歴史哲学の現代的意味

武光　誠

はじめに

「歴史哲学」という、学問の一つの手法がある。これはヴォルテールが、その著作『歴史哲学』[1]で用いたものである。かれは世界的視野で歴史を扱うと共に、一つの民族の文化をその民族個有の長い歴史の中でとらえようとした。

ヴォルテール以前の歴史家の視野は、思いのほか狭い。ヨーロッパの学者は東アジアの歴史に関心がなく、中国の学者は中華思想から中国を中心に物事を考えようとした。

このあと、エンゲルス、ウェーバー、トインビー等[2]の歴史哲学が持て囃された時期もあった。しかしそれらの流行は一過性のもので、現代の歴史研究者の多くは個別の事柄の究明に重きを置いているように思える。

しかし筆者は

「個々の主題は広い世界のあらゆる時代を知ったうえで明らかにすべきである」

という立場をとってきた。そしてこれまでに歴史哲学の視点に従って、筆者の歴史研究の手法に言及した幾つかの著作を発表した。『一冊でつかむ日本史』[3]では、日本史の特性を世界史の流れの中で考えた。『ものづくりの歴史にみる日本の底力』[4]は、日本の科学、技術史の中から日本文化の独自性を説いたものである。また『神道、日本が誇る「仕組み」』[5]において、日本思想の特性に関する独自の説を出した。

さらに『日本人なら知っておきたい！所作の「型」』[6]で、「人間らしく生きるために、日本思想から生まれた「粋」の哲学が大切である」という主張を述べた。

本稿ではそのような研究を踏まえて具体的な歴史研究のあり方について考察しよう。歴史を学ぶことは、

「自分が経験できない、多くの他者の人生、他者の考え方を知りたい」

と願うことから始まる。優れた人間性を持ち人びとを導く偉人のいないところに、歴史は生まれない。

そして過去の人びとの人生を知ると、かれら各々の生き方がその時代の科学、技術の限界の中でつくられていたことがわかってくる。邪馬台国の女王、卑弥呼が一生、ヨーロッパを見ることはない。これに対して現代人は、飛行機を使って簡単にパリにでもロンドンにでも行ける。

筆者は歴史から得る教訓として、次のものをあげておきたい。

「一つの時代の科学、技術を知って、それと上手に関わり、科学、技術をうまく使いこなすことが豊かな人生に繋がる」

次章ではこの点を踏まえた上で、歴史を描く意味について考えよう。

一、歴史家の役割

良い歴史書を描くことは、

「的を見て正確に矢を放つ」

ことから始まる。何を書きたいかわからないもの、書き手の主張があちこちにずれるものは、読んでいて空しくなる。確実に的を掴むためには、その背景となる広い教養が必要である。

それは縦と横との、総合的な知識から生み出されるものだ。原始時代から現代までを見通す縦の知識と、世界中のあらゆる民族の歴史を比較文化の視野で掴む横の知識を合わせて持つ。それがなければ、歴史上の個々の事柄の意味を、正確に把握出来ない。

良い本を探し出す目利きであらねば、有益な教養を身に付けることは出来ない。学問を究めるために役に立つものは、現在販売されている書籍の中の千分の一（〇・一パーセント）ていどであろう。

主体的に読書を行なっていくことで、優れたものと質の低いものとを区別する目が育っていく。子供のころ父から、

「美術品の鑑定眼を身に付けるには、最高級の物だけをひたすら見るのが良い」

といった話を聞いたことがある。そうすると価値の低い作品はすべて、出来損ないに見えてくるという。

愛読書とすべき良い本を知れば、あれこれ独自の考えを交えてそれを繰り返し読んでいく。自分の研究で迷った時は、自分の学問の基礎となる本に立ち返って考える。

このようにして複数の魅力ある本から時間をかけて身に付けた教養は、間違いなくその人が学んできた個々の著作の著者の教養を超えるものとなっていると考えてよい。

それと共に哲学、歴史学などの文科系の学問を研究する者は、独自の科学観を持つ必要がある。ここの科学とは、「自然のあり方を説明づける見識」と呼ぶべき教養である。

あらゆる人間は、大きな自然の中で生かされている。だから人間を自然から切り離して物事を考えると、書き手の頭の中で創作した人形のような現実観のない人物が出来てしまう。

アリストテレス、パスカルなどに代表される自然科学が哲学から切り離される前の西欧の名の知られた哲学者は、すべて第一級の科学者であった。新井白石などの江戸時代の高名な歴史学者の多くは朱子学者であったが、かれらは朱熹らが取り入れた陰陽五行説にたつ東洋の

最新の科学を使いこなしていた。

歴史家は自分が生きる時代の最新の科学と人間の関係を正確に把握した上で、各自の研究主題に取り組まねばならない。

筆者は幅広い知識を踏まえて、出来る限り客観的に物事を考えるように努めてきた。そうであっても、

「個々の歴史家が書くものは、すべて相対的である」

という点を十分理解している。一人一人の学者は、それぞれ異なる生い立ち、異なる理想を背負っている。だから歴史家は、「さまざまな立場をとる他者がいる」ことを知った上で、意見を発表していかねばならない。

「書き手の考えが正義で、それ以外は悪だ」と主張して読み手を洗脳（マインドコントロール）する著作を、世に出してはならない。

「これは、さまざまある考え方の一つだ」

と断った上で論を展開するのが正しい手法である。

これまで極めて多数の歴史書が刊行されてきたが、歴史家の著述には多様なものがある。これは個々の書き手の人間性の違いから来るものである。

筆者はこれまで、「出来うる限りきれいな気持ちで、研究に臨む」ようにしてきた。そして、「暖かい視線で、歴史上の生きた人びとを見た」本を書くように努めてきた。

気分が沈んだ時や体調の悪い時は、研究を一時的に休むのがよい。そういった元気のない時には、ろくでもない事を考えがちだ。

楽しいことを見付けたり、山や海の自然のきれいな所に行って、気持ちを明るく保つのがよい。悲惨なニュースや他人のスキャンダルを知るぐらいはかまわないだろうが、深い関心を寄せるべきではない。

筆者は前々から、

「学者は、学者である前に上品な紳士であれ」

と主張してきた。もっともこれは格闘家のルー・テーズの、

「プロレスラーは、リングの上では野獣、下では紳士たれ」

という言葉がかっこ良いと思って考えたものではあるが。

「日本文化の底流に粋の哲学がある」[7]と説いてきたが、筆者は「粋な生き方をする人間」を、「紳士」と考えている。

高価な服を誇らし気に着て、庶民を見くだし贅沢な生活をする者は、紳士ではなく野暮な下卑た人間だ。

「いかなる時も正直に過ごし、卑怯な振る舞いをしない」

「つねに明るい気持ちで、他者に接する」

「身ぎれいにして、つねに周囲の人間の気持ちを考えて生活する」

「自然の恵みに感謝して、自然を大切にする」

「自分の良心に恥じない、立派な仕事をする」

こういったことを心掛ける者が、粋な人間である。江戸の人間は誰も粋に生きようとした。粋な人間は、異性に好かれた。筆者は真剣に、こう考えている。

「日本じゅうの人びとがすべて粋になれば、日本の将来は明るくなる」

しかし現実には損得計算を重んじる、粋のわからない人間がふえている。日本的な粋に魅かれた理由は、筆者が防府という地方都市の名

門の流れをひく家に生まれたことからくるらしい。筆者は家の中で幼い時から、

「周囲の手本とされる立派な人間になれ」

という圧力を受け続けていたような気がする。

東京大学の学生だった時は、粋という発想から、いつもお洒落なかっこうをしていたような気がする。長身で主張を持った着こなしをした筆者は、学内で目立っていたらしい。赤坂見付を歩いていた時にスカウトに声を掛けられてモデルをやったこともあるが、カメラマンの言われるままに作り笑いをすることに空しくなってすぐやめた。

それを踏み台に、テレビに出ようとか俳優になろうとかいった気は全く起さなかった。人生いろいろであるが、歴史書に名前を残す人間には、いくつかの型がある。

一方で政治家、高級官僚、財界の有力者といった権力者がいる。学者、格闘家や、名俳と呼ばれる俳優、女優は、持って生まれた才能を最大限に生かして名を知られた人びとだ。音楽家、小説家、画家、スポーツの名選手などもいるが、かれらは限られた愛好家だけに好まれて名を成した。

残念ながら時代の流れに合わず筆者は歴史に名前を残せるまでの学者にはなれなかったが、誰もがある種の瞳れの目で、秀でた学者、格闘家、俳優、女優を見ているように思える。

自己の利益を求めて、政治家などの権力者に近付く者は多い。また日本の大部分の人は、好みの音楽や小説を求めている。かれらは金銭や一時の楽しみが得られれば十分で、政治家や音楽家の人間性などどうでもよい。嫌な「じじい」の機嫌をとって出世したいと考える者が、大多数であろう。葛飾北斎や十返舎一九の作品が好きでも、作者のあまり立派でない実生活を知る者はそう多くあるまい。

これに対して私生活がだらしない学者、格闘家、名優は、軽蔑されて徹底的に叩かれる。誰もが心の奥で、知性、体力、品性を兼ね備えた人間に瞳れているためであろう。

独力で、誰にも出来ない研究成果を作り上げる学者。体一つで戦って、誰にも負けない格闘家。与えられた役になり切って、身一つで多くの人を涙させ、笑わせ、感激させる名俳。いずれも、桁外れにかっこ良い。だから人びとは、

「自分が真似たくても、近づけない世界にいる者は自分をはるかに超える、完璧な人間」

でなければならないと考える。ゆえに学者の道を志す者は、大衆につけこまれる隙のない紳士たろうとする。

筆者が「第一級の学者になろう」と真剣に考えるようになったきっかけをつくった、一冊の本がある。京都大学に入ってまもない、将来のことをあれこれ悩んでいた時期のことであった。

たまたま京都大学図書館で借りた、「中国古典短編小説集」といった題の古い本があった。その中で、次のような話を見付けた。

「教養のあるなみ外れて美しい良家のお嬢さんが、見合いで名家の若殿を紹介された。相手が美男子だったので嬉しくなっていたところ、若殿がある時の宴席で有名な漢詩の名句を知らないために恥をかく場合を見てしまった。

盛り上がっていた恋心が一気に冷めたお嬢さんは、次の句を結びにした一篇の漢詩を記して若殿に別れを告げた。

『見掛け倒しの　妻たちよりも　芸妓（芸者）のほうが　幸福だ』

親から貰った見た目以外に自慢できるもののない、見掛け倒しのつまらぬ男には絶対に成りたくない。それなら何をなすべきか。その時に

「筆者に出来ることとは、好きな学問の道で尊敬される人間になることだけである」

と考えた。何か思い煩う度に、この中国の古典を思い出した。

四十歳すぎて三十冊あまりの著作を出して学者としてある程度の自信を持った頃のことであった。ふとその「中国古典短編小説集」を読み返したくなって、あれこれ探したことがある。

しかしその賢こいお嬢さんと哀れな若殿の物語には、二度とお目に掛かれなかった。愚かな若殿であっても、金の力にものをいわせてそこそこの妻を迎えられたと思いたい。一度失恋しただけのことで自信を失って、使い物にならなくなったとしたら気の毒すぎる。

頭の中に高度な学問があっても、学者とは認知されたい。人びとに物事を伝える発信力が学者には欠かせないからである。筆者は若い頃、きれいな文章、正確な日本語、ごまかしのない表現力を求めて、優れた児童文学を読み渉った。

大人向けの小説は読者を驚ろかせる設定を用いたごまかしがきくが、世間の汚い部分を知らない素直な子供の中には、美しいものとそうでないものとを見分ける直観がある者がいる。

どうとでもとれる曖昧なカタカナ語を多用したり、思いつくまま記した前後矛盾だらけの筋の通らぬ著作を読むと寂しくなる。著書の中で主張すべき主題と、緻密な構成を定めた上で、執筆に取りかかるのが望ましい。

俳優が使う「役が降りて来る」という言葉がある。まず主張したい主題を定め、それを知るのに有益なさまざまな参考文献、資料をきっちり読み込む。それを頭の中で整理して、ノートにまとめていく。この営みを進めるうちに突然、「役が降りた」という気分になり、一気に構成がまとまる。

「歴史書は、芸術品であらねばならない」

と筆者は考えている。わかりにくい書物を書くのは、簡単である。読者の立場にたったかみ砕いた説明をしていくのに、多くの気遣いが必要なのである。文科系の良書とは、

「読みやすいが、中味の濃い本」

である。次章ではこれまで記した手法にたって、人間の現在と未来について記そう。

二、歴史の発展と人間

私たちは、近代科学の恩恵の中で生きている。一七世紀末のニュートンに始まる近代科学は、人間の生活を急速に豊かにした。一八世紀末にイギリスで産業革命が始まり、それまでの手工業に代わって機械を用いた大量生産が世界じゅうに広がっていった。

二〇世紀はじめから農業の機械化が進み化学肥料、農薬が普及し、

食料まで量産化された。「食べることで精一杯であった時代」は、きわめて長かった。近代化以前には、大部分の者が自給自足に近い生活をしていた。

このような時代の人間が知る世界は、狭かった。しかし近代科学は、人類を取り巻く環境を一変させた。今では金銭さえ用意すれば、世界じゅうの珍しい物が買える。近代科学の発展による資本主義の盛況のなかで、ケインズ経済学[8]が持て囃された。

それは消費がふえれば、好況になり人びとが豊かになると主張したものだ。しかし経済が発展するにつれて、知らぬ間に「人間が小さくなる」、つまり個々の人間が重んじられない存在になっていったのではあるまいか。

人びとが助け合ってようやく食料を確保していた時代には、同じ村落の人間は誰もがかけがえのない仲間であった。しかし資本主義の進んだ現在では多くの者が、自分の利害をもとに他者の価値を判断する。

「役に立たない人間に関わっても得にならない」

と考えるのだ。こういった者は、町の雑踏の中にいても、自分一人しか存在せず、周囲の人間が芝居の背景の書き割りのように見えてしまうのであろう。

近代科学は、すべての自然現象を数式を用いて説明づける学問である。そして近代科学に立った機械工業の発展の中で、経済面の事象を数式で考える経済学が発生した。その数式は個々の人間の感情を全く考慮せず、すべてを計算の対象とする。

気の合った取引先との楽しい会食代も、意地の悪い相手との食事代も、同じ一万円の交際費と記帳されるのだ。

企業などの組織の指導者が、そのような手法にのめり込むと、こういった感情にとらわれる。

「給料の五倍の利益を会社にもたらさない人間は、有害だ」

「計算上利益にならない人間は、不要だから切り捨てよう」

こういった計算だけで物事を考える人間の多い社会は、恐ろしい。近代科学の発展によって大部分の者が、昔よりはるかに怠惰になってきた。機械が、多くのことをやってくれる。食料は安価になり、大して働かなくても食べていける。

本を読んで学ばなくても、パソコンがインターネット経由で答えを教えてくれる。だから現代の社会で「他者に代え難い価値のある人間」になるのは難しい。

このような動きの中で、ハイエク[9]などが唱えた新自由主義が広まってきた。これはケインズ経済学を批判した新たな経済学であるが、それは

「一部の大金持ちだけが支配する社会が、望ましい」

ととられかねないものだ。

こういった時代であるから、近代科学が切り捨ててきた、「計算できないもの」の価値を見直すべきではあるまいか。

江戸時代以前の日本に広まっていた陰陽五行説にたつ科学は、次のような立場をとっていた。

「一人一人の人間が異なる個性を持ち、同じ鉄や木材であっても一つ一つの素材はそれぞれ微妙に違う。さらに同じ人間、同じ素材であっても、季節や天候の変化によって少しずつ変化している」

そのために江戸時代の職人は、一つ一つの素材を見究め、それがもつ良さを最大限に引き出すように努力した。

刀鍛冶なら経験をもとに焼いた鉄を冷やす水の温度を季節毎に変えていった。味噌や干物を作る職人は、温度や天候に合わせて塩加減を調節した。

このような丁寧な手作りの職人芸による商品は、機械作りのものにない感動を与えてくれる。日本の職人は、顔も知らぬ消費者に感動を与えようとして、より良い「ものづくり」に努力してきた。

素朴な感動が、人間の心を優しく強くする。

「海を美しい、花を可愛らしい、旨い物を食べると嬉しい。優れた絵画や音楽を知って喜び、好きな服を見付けて手に入れて着て感激する」

これが出来る者は、他者にも感激を与える人間になりたいと考える。そして精進努力して、強い心の持ち主になっていく。

「僕が握った寿司を食べてくれた、お客さんの笑顔が最大の励みになります」

という寿司職人の言葉を聞いたことがある。損得計算抜きで、自然な形でこう言える人びとは素晴らしい。

心掛けしだいで、人間は無限の可能性を持つ。日本には古くから「弱者を守り、みんなで幸福になろう」とする文化があった。「弱きを助け強きを挫く」、武士道の道徳が行なわれた国であったのだ。

江戸時代末までの日本人は、誰もが「身の丈にあった粋」を実行してきた。大きな慈善事業は行なわなくても、困っている知人の相談に乗ったり、災害の被災者のために少額の寄附金を集めたりした。

日本人は、本来は争いを好まない平和を愛する民族である。戦争放棄を唱える「憲法第九条」は、日本の誇りである。

そうであっても人間の心は弱く、何かの弾みに本来の志と正反対の行動をとってしまう。このことを知り尽くした野心家が、

「敵を作り上げて人びとを団結させて災厄を持たらす」

事態が何度もあった。群衆心理が働きはじめると、良心的な、少数意見は封じられてしまう。ナチスのユダヤ人弾圧は、もっともわかりやすい例である。現代でも世界のあちこちで、

「特定の国家、民族、宗教、集団は人類の敵だ」

と主張する者がいる。しかし、「鬼畜米英」などと演説する者を、日本から二度と出してはならない。

「敵を作る」論理は、何でも「善か悪か」の一元論にもっていく。そして人びとを煽動する野心家は必ず、

「金貸しをして庶民を苦しめるユダヤ人がいなくなれば、ドイツは幸福になる」

とユダヤ人排斥と主張したヒトラー『我が闘争』と同じ論理を用いる。

「このような計算になるから、悪人どもを排除すればあなた方の得になる」

と説くのである。近衛文麿などの太平洋戦争直前の日本の指導者たちは、こう言った。

「アメリカ、イギリス、オランダ等の植民地を奪って大東亜共栄圏を作れば、日本人はすべて豊かで幸福になる」

冷静になれば、このような言葉がまやかしであることがわかる。他国の人びとにも、それぞれの人生がある。自分たちの損得計算よりも、他者の生命、財産、自主性が重いはずである。

「数式で物事を考える者に、人びとは救えない」

だから私たちは、人間愛を最も重んじる立場の者を日本の指導者とすべきである。

しかし近代科学が広まると、計算で物事を判断する場面がふえてくる。そのために私たちは、人間らしく生きるための知恵を模索し続けねばならないのである。

むすび

歴史書と小説とは、異なる。小説は一時の楽しみのための面白い物語であるが、歴史書は「過去の興味深い出来事」として済ませるべきものではない。

より良い人生を作り上げるために、歴史を学ぶべきである。過去の人間の営みを知る中から、人間とは何かが見えてくる。さらにそれより一歩踏み込むと、科学、技術の発展が一つの時代の政治、社会、経済、文化を作ってきたことがわかってくる。

そうなると、

「私たちは、現代の科学、技術とどのように関わるべきか」

を考えたくなる。本稿では歴史を見る中から、

「すべての人間が粋になれば、日本社会は良くなる」

「物事を計算だけで判断しない人情のわかる国の指導者を選ぶべきだ」

と説いてきた。

歴史哲学という学問は過去の人間の歩みを知ることによって、自分のより良い生き方を探るものである。これに触れることは、一人一人の人間が自らを歴史の中に位置づけようと学び始めることに繋がるものである。本稿を読まれた方々が、自ら書物を読み、自ら考えて最善の答えを見附けることを願って本稿を終わりにする。

註

（1）ヴォルテール（フランソワ・アルエ）『歴史哲学』（安斎和雄訳、法政大学出版局刊、一九八九年）

（2）フリードリヒ・エンゲルス『家族・私有財産・国家の起原』（戸原市郎訳、岩波書店刊、一九六五年）、マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（大塚久雄訳、岩波書店刊、一九八九年）、アーノルド・トインビー『歴史の研究』（長谷川松浩訳、社会思想社刊、一九七五年）など。

（3）武光誠『一冊でつかむ日本史』（平凡社刊、二〇〇六年）

（4）武光誠『ものづくりの歴史にみる日本の底力』（小学館刊、二〇一一年）

（5）武光誠『神道――日本が誇る「仕組み」』（朝日新聞社刊、二〇一四年）

（6）（7）武光誠『日本人なら知っておきたい！所作の「型」』（青春出版社刊、二〇一四年）

（8）ジョン・ケインズ『貨幣論』（小泉明・長谷川惟基訳、東洋経済新報社刊、一七九七年）など。

（9）フリードリヒ・ハイエク『新自由主義とは何か』（西山千明訳、東京新聞出版局刊、一九七九年）など。